

語源学と想像 (2)

— 印欧語根 AK の意味するものについて —

坊 城 明 文*

Etymology and Imagination (2)

— On the Meaning of the Word-stem, AK, in the Proto-Indo-European —

Akifumi Bojyo

Etymology can be likened in some respects to archeology in which no amount of toil in excavation will always lead us to what we have aimed at finding. It may be that we come across a windfall we least expected to be granted to us. Or, we may not be rewarded by the findings, which proves on close scrutiny to be false ones. In the preceding paper, we tried to follow, back into the Neolithic age, an etymological route to be discerned in the original relationship between the verb 'hear' and the noun 'ear'. The purpose of this paper is to throw some light on one of the archaic word-stems in the misty world of the Proto Indo-European.

はじめに

現代の言語学が人類の共通祖語としてその存在を確証している印欧祖語(Proto-Indo-European)は、本当に今から6000~5000年前に日常語として話されていたのであろうか。ふとこのような疑問にとらわれるほど、この新石器時代の言葉は、今日のわれわれにとって想像の域すら超えた、深い神秘の霧に包まれた存在である。まして、その祖語から派生した膨大な数の子孫語が6000年もの時の流れを貫いて現代にまで生きながらえていることを実感することは、なおさら難しい。しかし、印欧祖語はたしかに実在していたし、話されていた。

【西暦1993年、雪と氷に閉ざされた北アルプスの山中で一人の男の凍死体が発見された。粗い麻縄の粗衣を身に纏ったこの中年の男は、姿形からして現代の人間とは思われなかった。しかし、その表情は最近の遭難者とはほとんど見分けがつかないほど、鮮やかであった。そしてその遺体には、いかなる刑罰を受けた者であろうか、X 印が点々と入墨されていた。

検査の結果、男は紀元前3300年頃の新石器時代の人間であることが判明し、世界を驚嘆させた。人びとは、5300年の時の隔たりを超えて突如現代に姿を見せたこの男の、あたかも生けるが如き鮮やかな顔に見入った。するとそのゆるく結ばれた唇は今しも動きだし、やがて大きく口を開けるや、深い眠りから目醒めた者のようにごく自然に、かれの母国語インド=ヨーロッパ祖語を喋り出しそうである…。 “アクーエテ” 「諸君、話を聞いてくれ」と。】

* 教養部

C) B.C. 3300年 新石器時代 [AK の意味するもの]

長い漂泊の後、われわれはようやくインド=ヨーロッパ祖語にたどり着いた。この最後の地にしばらく留まって、例えば今から5300年前、印欧語族の人々が話していた原初の言葉について、その生成の意味を考えてみたい。言葉が言葉として生い立つ始源やその発祥の根源的な事象について。言うまでもなく、人類最古の言語の一つである印欧祖語にはいかなる形の文献も残されておらず、その分岐する以前の単一の言語形態がどのようなものであったのか、それを知る手掛かりは想像による以外にはない。しかし、この印欧祖語に関して、現代の言語学は学者によっては二千数十語の、最も厳しく絞りこんで六百語前後の語根 word-stems を推定している。たとえばこれまでわれわれが追い求めてきた「聞く」という動詞の印欧祖語 akous は、ak と ous「耳」からなる言葉であるが、この ak- もそうした語根の一つである。では、この ak- を語根とする akous という言葉は、元来、どのような意味をもつ言葉だったのだろうか。つまり、ak- という語根が生み出したこの言葉の原初的な意味はどのようなものであったのだろうか。

まず、その発音を簡単に分析することから解明を進めてみよう。資料[1A]を見てみる。

[1A; hear ... < Gmc xauzjian) ← IE (ǵ)keu-... (Gr. akoúein)]

この標記から見て取れることは何だろうか。それは、古典ギリシャ語の ακούειν に継承されたと推測される発音からして、akous はおそらく [akú:s] と発音されたのだろうということ、さらに言えば、頭音の [ǵ] は後続の喉頭破裂音 [k] をより強く発声するための補助的な働きをもった半母音であって、それ自体としては弱音だろうということである。したがって、この語の頭音が弱音である限り、アクセントが後続の音節に落ちることは当然であろう。これが資料[1A]の (ǵ)keu- からかうじて読みとれる意味である。(そしてこの語頭の半母音 [ǵ] に関して、いわば言葉の世界の自然淘汰である aphasis つまり「語頭母音消失」の運命に見舞われることになったのが、印欧語族の中でもゲルマン語系であっただろう。その結果は、われわれがすでに見た前ゲルマン語の推定動詞 kous が証明している。) したがって、この印欧祖語 akous において [k] は実質的な語頭子音として、また名詞ウス(耳)を支配従属させる基幹音として、ある強烈な響きを発しているように思えるのである。いずれにせよ、この語の発音の要は、[k] の発音の本質に鑑み、喉頭を一気にキックして(蹴って)生ずる純粹で強烈な破裂音にある。

(ここでおそらく、次のような疑問が出るだろう。いったい、この ak に強烈な喉頭破裂音 [k] の響きがあるからといって、音声の性質によってその意味が言葉に付与されるものであろうか、と。これに対してわれわれは次のように考えたい。言葉における語感と語義との関係は、言葉が生い立つ最も原初の状態にあっては内的で根源的な関係だったのではないだろうか。われわれはこの関係自体からいかなる言語現象が立ち現われてくるかを見守ってゆきたい。そしてその解明には、何よりも音韻と語感は無視できない要素である。いま、この [ak-, (ǵ)keu-, keu-] と繋がる一連の音声系列の中心をなしているのは、あくまでも [k] 音であって、この強烈な喉頭破裂音が与える音感からどのような意味の言葉が発生してくるかを追求していきたい。)

とまれ、はたして ak- 自体に akous の語義形成に関わる何らかの意味があるのかないのか。資料にあたってみよう。

[2A; hören... Den Anlaut gr. ak-, germ. h- führt Kretschmer auf das idg. Adj. ak- 'scharf' (in gr. ákros, lat. acer) zurück, s. Ecke Idg. akous-wäre dann 'ein scharfes Ohr auf etw. habend'.]

見られるように、今日の語源学は印欧語の語頭辞 ak- に scharf という意味の形容詞を読み取っている。このわずかなヒントを手掛かりに、想像に自由な手綱を与えてみよう。

akous (聞く)とは、どのような行いであろうか。それは 'auf etwas ein scharfes Ohr habend' すなわち「何かに鋭い耳をもって」する行為である。「鋭い耳をもって」とは、耳が立つまでに集中して、ということだ。だから、聞くとは、「尖った耳」をもつこと、つまり耳を側立てて何かに聞き入ることである。そしてこの sharp, pointed (先の尖った) という意味をもった ak- は、現代の語源学によって印欧語根の主要な一つに数えられている。語根とは、言ってみれば、そこから泉のように言葉が湧き出てくる「源泉語」であって、いまのピンと立った耳のように、何か鋭く突き出たもの、鋭角的なイメージを与えるものには、多く ak- が冠せられることになった。

では、ak- が造語力豊かな語根であるとすれば、そこからは新石器時代の、たとえば今から5300年前の人々の生活や自然現象、物の形状などを写し取った数多くの言葉が生み出されているのではないだろうか。また、この語根に錐のような鋭く突き出たイメージがあるとすれば、そこから派生した言葉はほとんどそのまま古代語に受け継がれていったと考えられないだろうか。そしてやがて多様に綴字を変えながら(例えば ac-, ach-, ag-, ah-, aqu-, aig-, aix-, ax-, eag-, edg-, ok-, ðξ-, oxy- 等に巧みに変身しつつ、あるいは ak→ka(ca, qua) へと metathesis「音位転換」を遂げながら)今日もなお現代語の中でしぶとく生き延びているのではなかろうか。では、どのような言葉の群れがこの印欧語根 ak- から湧き出てくるのか、ak- にまつわる印欧語の周辺をしばらく散策してみよう。(以下、英・独・古希語を除く羅・仏・伊語はそれぞれ L・F・It. と略記)

この新石器時代、生活用具の中心をなしていたのは、もちろん磨製石器である。石の印欧語根としては stei- や akmen- があるが、stei- の方がマテリ-(素材)としての原石(stone, Stein)だとすれば、akmen- は ak から分かるように、sharp にされ、pointed なものに加工された石、すなわち生活器具としての石器だったとみてよい。では、石材としてどんな石が選ばれたのだろうか。もちろんもっとも硬質な岩石、叩けばカ-ンとかキ-ンといった鋭く耳を打つ、たとえば黒曜石のような硬度の高い石だったろう。その keen な音は、採石場(quarry)から聞こえてくる。その切り出された石塊を破碎し、さらにその石片(ἀγίη, ἄγμα)を研磨(L. acuare)する。その道具が砥石(ἀκόννη)だ。そしてこの研磨所(F. aiguiserie)で、いろいろな品々が作られただろう。

砥磨された(L. acutus)輝石(augite)の鏡や、骨をも断ち切る鋭利な石の刃(ἀκμή, L. acies, Ecke, edge)、鋏(ἀκίς)、石斧(ax, Axt)、手斧(hatchet)、ハンマー(hammer)、それに武器類も。例えば石の剣(L. acinaces)や短剣(ἀκινάκης)、研ぎ澄まされた(ἀκαχμένος)鋏の穂先(αἶχμη)のついた鉾や槍や投げ槍(ἄκων, L. aclys)、その槍を佩びた戦士が槍兵(αἰχμητής)なら、その槍兵に搦め捕られた兵士が αἰχμάλωτος (捕虜)だ。

石包丁で調理された食べ物の味についてはどうだろうか。いわゆる五味のうち、強い刺激性の味には、辛い(acrid, F. âcre)、苦い(L. acerbus, acerb)、酸い(L. acidus, acid)といった具合

に ak が冠されている。ちなみに、英語の vinegar (酢)は vine+aigre つまり酸っぱくなった酒からきた言葉である。要するに、舌にピリッとする、鼻にツンとくる、といったシャープな味を表す言葉は、どれも ak- から生み出されている。

植物や樹木についても、次のような形容詞、つまり刺のある(aculeate、F. aculé)、針状の(acicular, F. aiguillé)、鋭尖形の、または尖頭形の(acuminate)、あるいはまた食べてみて酸っぱい(acid)と感じられる茎、葉、木の実などには、総じて ak- がついた。例えば、acacia (アカシア)、acoro (菖蒲)、eglantine (野バラ)、oxyacantha (サンザシ)、acanthus (アザミ)、agrifolia (西洋ヒイラギ)、とんがり頭の acorn, Eck, Eichel (ドングリ)とその木 oak (古代英語では ac), Eiche(樅)、acer, ahorn(楓)、akoniton, aconite (とりかぶと)、oxalis (カタバミ)、acetosa (スカンボ)、achillea (ノコギリソウ)などがそうである。

鳥や動物類ではどうか。最も獰猛な猛禽 *αἰγυπιός* (秃鷹)や、射すような鋭い視線(L.acies)をもつ鷲(eagle, F. aigle)が ak-から生まれたし、acridio (イナゴ)、echidna (ハリモグラ)、海のウニ(echino)、ハチクラゲ(calefa)等もそうである。また、人の性質・言動では辛辣さを表わす acrimony や本来激烈さを意味する eager も ak- から派生した言葉であり、身を切る寒さの北風は aquillo と呼ばれた。身体感覚としては 例えば錐で刺したようなキューとくる acute な胃(スタマック)の激しい痛み(ache)というときの acute も ache も、ak- の原義を今にもっとも忠実に伝えている子孫語である。また、突然襲ってくる ague (激しい熱、おこり、悪寒)や acromegaly (先端肥大症)の病名も ak- から付けられた。さらに言えば、ak- はギリシャ語では *ὀξύς* となり、sharp, acute の意味であるが、味覚についても「酸っぱい」の意味をもつ。oxygen はだから、酸素である。

こうした ak- から生まれた言葉にさらに接頭辞や前置詞が付いて多くの合成語が作られていくと同時に、やがてその由来する語源も次第に忘れられていった。しかし、出生の語源に立ち返ってその言葉の来歴を知ること、よりいっそう根拠のある語義の明晰さが得られるのではないだろうか。そうした二三の例を、上記の言葉の中からとりあげてみよう。英語に、(病気の)激しい発作や(感情の)突然の激発を意味する paroxysm という単語がある。この語は、ギリシャ語の前置詞 *παρά* (応じて、次々に)とギリシャ語の動詞 *ὀξύειν* から生まれており、*ὀξύειν* すなわち oxy- ⇒ ak- (to sharpen, to irritate)である。もう一つ同じ *παρά* を使った言葉として、英語の paragon という単語は、規範、模範、典型、鑑などを意味する語であるが、この言葉の語源は何であろうか。それは *παρά* (逆らって)と *ἀκόνη* (砥石)あるいは *ἀκόνειν* (研ぐ)からきた言葉である。「規範」とはだから、自然の流れに逆らって自己を研磨する試金石、それによって自己を律し磨くための普遍的な規範のことである。その試金石が、たとえば時間であってもよい。すべてを腐食させる時間をアコネ-として、それに耐え得たもののみがひとつの典型たり得るのであるから。すべてクラシックなものがそうである。そしてそれは、時間の中であって時間を超えた歴史的現在に立ち得るということにはほかならない。

✽

✽

✽

【時間による腐食と言え、5300年という時のアコネ に耐え得たあの新石器時代の男の体をさ

らに検査した結果、現代医学の方面から次のような興味ぶかい報告がなされた。それによると、男が長くリューマチを患っていたこと、体の所々に刻まれたX印の入墨は、リューマチ治療の針(acus)を打つための箇所を示したものであること、しかも驚くべきことは、その鍼灸治療(acupuncture)に用いられた場所を示すバツ印の位置が、現代の針治療における鎮痛用のツボの位置と寸分の狂いもなく(ἀκριβῶς)ピッタリと一致していたことである。これらの事実は新石器時代の当時、すでになんかなり高い水準の文化が発達しており、病気治療に対する鋭敏な洞察力(acumen)を備えた専門の医術師(あるいは魔術師)が存在していたことを裏付ける証拠と考えられる。】

✽

✽

✽

このように、印欧語根 ak- は新石器時代の人々の生活をさまざまな面から映しとった数多くの言葉を生み出し、それらの多くは今日の言語生活にまで及んでいる。

それでは、ak- に続いて次に ous つまり ear (耳)について、ごく簡単な語源散策をしてみよう。たとえば、こんな情景を想像してみる。

野原を駆けていた一羽の野ウサギ(hare) がふと立ち止まると、あたりの物音にじっと耳を澄ましている。そのピンと立った耳(ear) は、周囲の畑の勢いよく芽を出した麦の穂に似ていないだろうか。周知のように、英語の名詞 ear には「耳」の他にもう一つ、この「穂」の意味がある。ドイツ語なら Ähre 、オランダ語では aar である。そしてこれらゲルマン語派の言葉も、次のような共通の遡源の道を辿って最後にはやはり印欧祖語の ak- にたどり着く。

[OE ear/ON ax/got. ahs/germ. ahiz/vorgerm. akes/Lat. acus/Gr. akosté← IE ak-]

大地から勢いよく生育した麦の穂も、音に聞き入って側立った動物の耳も、同じ ak のイメージでとらえられていたことがよく分かる。

(ちなみに、人類の歴史で麦(ἀκροσῆ) の栽培が始まったのは紀元前8000年頃といわれているが、この麦などの穀物(ἀκρί) の成長する大地が英語では earth である。そして ear という言葉には、この恵みの大地 earth を「耕す」という意味の、いまでは廃語となった古い動詞があった。だから、‘to ear the earth’ が「大地を耕す」ならば、その大地(earth)から芽吹くものが ear である。われわれ日本人のもつイメージでいえば、春の野に生えるゼンマイや、秋の森に生える「茸」(キノコ)が大地の「耳」ear にあたるかもしれない。ただしゼンマイや茸(agaric)のように自然に発生するものとはちがって、耕された大地から生育する〈尖ったもの〉のイメージには、やはり麦やトウモロコシといった穀物の「穂」がピッタリである。

いずれにせよ、大地(earth)と耕す(ear)との連想から、この二つの言葉を同根語と見なす言語学者も当然でてくる。しかし、これが間違っていることは、earth やドイツ語の Erde の語源をみれば一目瞭然であって、実は「大地」の語源は印欧語では、われわれ「人間」の語源と同根なのである。この興味ある事実の語源的解釈については、いずれ後に述べてみることにしたい。)

D) 古代語の茂みの中で [AK- の周辺]

このように、今を去る6000年以上昔から(その最古の起源からいえば、一説では推定一万二千年前から)印欧祖語は現代の世界へまで滔々と流れてきているのである。その言葉の流れの源泉の

ひとつが、われわれの見てきた ak- だった。いまわれわれは、この語源の旅のそもそもの出発点となったあの素朴な疑問に明確に答えることができるだろう。いったいなぜ hear の中に ear があるのか。それは、聞くとは ak な耳をもつことだからである。ak な耳、つまり「側立った耳」をもつことが、すなわち「聞く」ということであって、垂れた耳、本来の働きを欠いた耳では、聞くことにはならない。要するに、聞く(hear)とは、耳を研ぎ澄まして音を聞き分けることそのことだったのであり、耳(ear)とは、その行為における「側立って突起したもの」を意味したのである。そしてその突起したものが頭から出たものであれ、大地からのものであれ、同じく ak なものと呼ばれたのである。この突起したものが大地自身の姿であってもよい。それが古代ギリシャ語でいう、ト.アクロン、すなわち「山の高み、頂上、頂点」であり、そうした高所に築かれた城塞がアクロポリスと呼ばれた。またそのように陰しく切り立った高所を異常に恐れるのが acrophobia (高所恐怖症)なら、いとも軽々と歩む(βαίνειν)のが、すなわちアクロバットだった。われわれの人生ならばどうだろうか。acne (にきび)の吹き出る青い春も終わってやがて来る人生のクライマックス、つまり活動と精力の充実の頂点、絶頂期はアクメ-(ἀκμή)と呼ばれ、古代では、男のアクメ は四十歳、そのアクメ-を過ぎると、はやパラクメ-(παράκμη)、すなわち衰微、衰退の始まりだった、とこのように印欧語根 ak- ひとつをとってみても、そこからは実に多彩かつ豊富な言葉の群れが泉のように湧き出てくるのである。

それでは、この溢れ出る言葉の泉 ak- は、単にそれだけで孤立した一つの語根にすぎないのだろうか。おそらく印欧語において、一つの語根はそれだけで生まれ出たのではなく、他の同根の語根とも深く地下の水源下で結びついていたのではなかろうか。いかに最古の根源語とはいえ、それらを単に根源的に存在したもの、原初の言語形態の直接的所与としてのみ受けとるならば、語根のもつ生命力、その限りない造語力を説明することはできないであろう。ある語根は他のいくつかの語根とさながら蜘蛛の巣のように縦に横に結ばれながら、しかも同時にその連結点である一つ一つの語根からは噴水のように言葉のシャワーが放射されていく。そんなイメージの中にわれわれの語根 ak- を置いてみたらどうだろう。網目をたぐっていくと、互いに姿も出自もよく似た兄弟語のような語根の放射点が見えてくるにちがいない。ak- の周辺に根を張っているであろう語根群をたぐり寄せてみよう。

ところで、語根間の親縁関係を確定する際に決め手となるのは、音韻の上で近似性があるかどうかということである。たとえば ais- という印欧語根がある。今日の英語の ask の語源であるが、これと ak- とはなんらかの点で語源的関連があると考えられるであろうか。何よりも音韻の上から、否である。これに対して、aik- という語根はどうであろうか。「槍や尖った武器で戦う」ことを意味するこの語根が ak- と関係があることは、ギリシャ語の αἰχμάζειν (槍で戦う)から直ちに分かるであろう。なぜなら、このギリシャ語は名詞の αἶχμη (槍の穂先、先端、戦闘、激しさ、激情)の動詞形であり、αἶχμη が ak- に由来することは、その意味に加えて、音韻の上からも確かめられるからである。ここから印欧語根 aik- は ak- から派生した準語根であることは明白であろう。あるいは次の例はどうだろうか。ギリシャ語で ἔχινος といえ、1)ハリネズミ、2)ウニ、3)(栗などの)イガ、などを表わす語であるが、これらにみなトゲがあるこ

とからこの語が ak- から生まれたことは明らかであろう。ところが『印欧語根表』では、有刺系を意味するこの echino- の語根を ak- ではなく、angwhi- としている。これはなぜか。ギリシャ語の ἔχιδνα あるいは ἔχιδνα は「毒蛇」を意味する言葉であるが、その印欧語根も angwhi- である。ラテン語 anguis (蛇)ならば、これによってその語源的由来が十二分に説明されるであろうが、ἔχιδναの方はなぜ echino- と同じ語根をもつとされるのだろうか。毒蛇は太古の昔、逆立つウロコに被われた棘皮動物(echinoderm)とみなされたからでもであろうか。その唾棄すべき姿形への嫌悪感において、蛇行する動きの不気味さにおいて、わけてもそのシャープな毒への恐怖において、毒蛇は当時の人々からもっとも恐れられ嫌われたであろう。ギリシャ語 ἐχθρα (憎悪、嫌悪)という言葉も、人類の記憶とともに古くから蛇蝎として忌み嫌われる(不幸な宿命を背負わされた)この爬虫類への嫌悪感から生み出されたと思える。

とまれ、echino- (棘皮動物)に関する限り、angwhi- が ak- と繋がる語根である可能性は否定できない。このように語根間の親縁性を確かめるには、音韻、とくに声母である子音の有無が決め手であって、いまの場合は、ak-, aik-, angwhi- における [k] あるいは [g] の口蓋破裂音の存在がそうである。さらに ak- の周辺語根を探ってみよう。

ギリシャ語に ἀκρωτήριον という、岬を意味する言葉があるが、この語も ak- (pointed)からきている。では、その長く伸びたものの先端が折れ曲がった場合はどうだろうか。曲がったところにある「かど」(corner)が angle つまり「角度」であり、先端が鉤状になっているもの、たとえば「釣り針」も angle である。angler とはだから「釣師」である。また、anchor (錨)もその形状から名付けられた。そしてこれらの言葉の印欧語根が ank- あるいは ang- であり、原義は「曲がる」である。するとヘビやウナギの語根が angwhi- であった理由も見えてくる。「曲がりくねって動くもの」がその初義であろう。すなわち angwhi- と ang- とは、相似語根といってもよいだろう。(実は、今日の英国 'England' の名も、この語根 ang- に由来している。5世紀ブリテン島に渡ってきた「アングル族(Angle)の土地」からその名がついたことはよく知られているが、ではそのゲルマン部族はなぜ〈アングル族〉と呼ばれたのだろうか。それは、かれらが釣で暮らしていた漁民だったからではなく、かれらの出身地、北ドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方の地形が angle つまり釣り針形であったからである。)

ところで、先端が折れ曲がっていてこれ以上先がない所、隅や角というのは、窮屈で狭苦しい感じをあたえないだろうか。ドイツ語 eng (狭い)の語根は、angh- である。この eng と英語の anger (怒り)とが同一語根に属する。なぜか。海の錨(いかり) anchor の語根 ank- (to bend) とちがっているのは、この怒りの語根 angh- には h がついていることである。この h は何の h であろうか。ラテン語 halatio の h, 英語ならば inhale や exhale の h といったらよいだろうか。[gh][グハ]、すなわち首を絞める(str-angle)ときの氣息の h である。英語の angry という言葉には、だから首を絞められて真っ赤に怒張した苦しむ顔面のイメージが抜きがたくある。angry の原義は「苦しみ」であり、苦しみが「怒り」を生む。そしてこの anger と同根語がドイツ語の Angst (不安、懸念)である。この語も、胸を締め付ける不安な感覚のひしひしと伝わってくる言葉である。心の不安な状態を指すドイツ語の形容詞 bang から、心臓の重苦し

く圧迫された感じがする。喉や胸の締め付けがさらに激しくなれば、不安は苦悩に変わるだろう。それが anguish (古代英語の enge) で、元来、息が詰まってもがく「苦悶」、臨終の苦しみを表わした。この身を捻って苦悶せる者の姿は、さながら anguis (毒蛇) に咬まれてのたうち回る、見る者をして目をそむけさす姿態を連想させないだろうか。以上の語例からも明らかなように、語根 angh- の原義は狭搾、狭隘(Enge)ゆえの呼吸困難、つまり to choke (窒息させる) である。この痛苦(pang)にあえぐ(pant)の意をもつ angh- に呼気音の h がつくと、hang すなわち(絞め殺す)となる。狭搾と悶絶の語根が angh- ならば、これとよく似た印欧語根 agh- はどのようなイメージの語根だろうか。『印欧語根表』には、[agh- to be depressed, be afraid; OE. ail. OE. awe] とあるが、awe とは ak- なもの、つまり「聳え立つ高いもの」から受ける精神的な圧迫感、畏怖、畏敬の念である。awe の語源は[ON. agi fear, anguish. Goth. agis fear, anguish+ IE agh-] である。ここからすぐ分かることは、この agony (苦悩、悶絶)の語根でもある agh- と anguish (苦悶)の語根である angh- とは、きわめて近い語根関係にあるということである。

こうして、印欧語根 ak-, aik-, angwhi-, ank-, ang-, angh-, agh- の線が次第に繋がってくる。ak- から発した語根線のメルクマールは、あくまで a-k あるいは a-g における子音 k と g の音韻的要素なのである。この点に留意しながら、さらに ak- の語根線をたどってみよう。ak- から出た語に egg という英語がある。動詞で「おだてる」「あおる」「駆り立てる」という意味をもつことばである。もうひとつ ak- の直系語に edge という英語(ドイツ語では Ecke)がある。本来の「刃」の外に、辺、隅、角、等を意味する語であるが、中世英語(ME) egge、古代英語(OE) ecg、古北欧語(ON) egg とつながるこの語の動詞の意味がやはり「けしかける」である。指摘するまでもなく、egg と edge がともに ak- から生まれた「兄弟語」であることは明らかであるが、注目したいのは、これらのどちらも「駆り立てる」「扇動する」という動詞の意味をもっていることである。というのは、印欧語の中に ag- という動詞の語根があって、その意味するものが、人を行動へと「駆り立てること」(to drive) であるからである。してみると、ak- は ag- とどこか深い根源でつながっているとは考えられないだろうか。

もしこの推測が正しければ、われわれは pointed「突出した」、sharp「尖鋭的な」を意味する形容詞語根 ak- から、「行為」「行動」の源泉語となる動詞の親族語根に出会ったことになる。印欧語根の中でも最も主要な語根のひとつであるこの ag- は、英語の act, agitate をはじめ、exact, examine などの膨大な数の印欧語が簇生してくる、もっとも豊かな語源の沃土である。ともに強烈な口蓋破裂音をもつ ak- と ag- が親属語根であるとすれば、連結したその造語力の強靱さからさらに周辺の語根を束ねつつ結ばれていったと見て不思議はないだろう。たとえば、「活動する」の語根であるこの ag- と「土地」「農地」等を意味する語根 agr- とは、ものを生み出す生産性の点で互いに無関係とはいえないのではないか。また、この agr- は「増大するもの」の語根である aug- とも親縁性がないかどうか。すでにそのいくつかの派生語で見たように、ak- から派生した古代ギリシャ語の ἄκρος には次のような意味、すなわち 1) 最先端の、最上部の、頂点の、2) 最も外の、3) 最も奥の、4) 最高の、最良の、抜きん出た等があり、その名詞形 ἀκρότης は、突出して高く聳え立つものの頂点、つまり極点、最高点を意味していた。とす

れば、この「高みを極めたもの」が精神的な意味で「崇高なもの」「尊貴なもの」として、人びとの「あがめる」(Gr. *agamai*) 対象となるのもごく自然なことであっただろう。人びとは群を抜いて高貴なものを「あおぎ」見る。英語の *august* (尊厳な) という語は、ラテン語の *augustus* に由来する言葉であるが、この語の印欧語根が *aug-* (to increase) であるとされている。しかし、語根のより根源的な意味において、*augustus* の *aug* は *awe* (畏敬) の語根である *agh-* と、したがって *ak-* と何らかの語源的関連があるとみることは許されないだろうか。*augustus* の語根が *aug-* (to increase) であるとしても、「増大するもの」が堆積して「うづ高くなったもの」(その印欧語根が *agger-* heap)に通ずるという派生義を汲んだうえで、なおかつ、そう言えないかと思うのである。

(至高の、神々しい、尊厳なる、等を意味するラテン語 *augustus* は、初代のローマ皇帝名ともなった。太陽が頭上に最も高く昇る月、八月にその名をとどめた皇帝アウグストスは、自身の名が意味する尊厳なる「高み」のギリシャ語 *ἀκρότης* を当然知っていたに相違ない。)

では、*ak-* に固有の突出した動き(*ag-*)が上下の方向ではなく横に、しかもある一定の範囲から外へ向かった場合は、*ak-* の意味はどう変化するであろうか。いま見たギリシャ語のアクロスの定義 2 の「最も外の」がそれに相当するであろう。「外へ」を表わす印欧語根は *eghs-* (cf. L. *ex*)である。すると *eghs-* は *ak-* とどこかで繋がり得るとみることはできないだろうか。

このように、語根間のつながりにおいても、語根からの派生語においても、音韻的変遷の根本をなすのは母音ではなくて、子音である。すでに述べたように、*ak-* が他の語根と同根と推定される語源的根拠は、子音における親縁性、われわれの語根線でいえば、*ak-aik-ank-ang-agh-anh-angwhi-ag-agr-aug-* (*eghs*) における無声および有聲の口蓋破裂音 [k] と [g] の有無にある。語根からの派生語についても、この事情は変わらないであろう。綴り字の表面的変化の根底に、子音ががっしりと根を張っているのである。二三の例を出してみよう。

太古の時代に生まれた *ak-* がはるか現代のフランス語の中で、語頭音に [eg] の発音をもつ語として今も命脈を保っていることは、あまり知られていない。それらの6000年以上を見事に生きのびてきた *ak-* の子孫語の纏った衣装のひとつが、フランス語では *aig* である。どのような衣装の言葉があるだろうか。

aigre [egr](えぐい、酸っぱい)、*aigu* (先の尖った)、*aiguille* (針)、*aiguiseur* (砥石)が代表的な例であり、さらに *aigle* (鷲) *aiguillat* (つの鮫)、*aigrette* (白鷺)、*aiguillon* (牛を駆るための突き棒)等もそうである。ちなみに *aiguiseur* (砥石)の動詞 *aiguiser* には、「研ぐ」「磨く」に加えて、「刺激する」「かき乱す」等の意味がある。*ak-* (sharp) と *ag-* (to drive) の二つの印欧語根の根源的同根性を強く示唆する動詞である。というよりも、このフランス語に対応する古代ギリシャ語の *ἀκονῖα* にすでに上述の二つの意味があることから *ak-* と *ag-* との語根的親縁性は隠れようもなく明らかであると思える。

また、フランス語の *agacer* (神経をいら立たせる、不愉快な音で耳をキーンとさせる、歯をうかす)という動詞も、われわれには *ak-* から出た英語の *edge* (刃物の刃)との親近性を感じさせる言葉のようにみえる。*edge* < OE *ecg* < L *acies* < Gr. *ἀκίς* の語源系列と今日の英語のイディ

オム on the edge (イライラした)の意味からしてそう思えるのである。もうひとつ ak- からの派生語に aquilégie (おだまき)にみられるような aqu を語頭にもつものもあるが、こちらの方はラテン語 aqua (水)の圧倒的な影響を受けたゆえであろうか、さすがにその数は僅少である。

言葉の語源的継承の際の音韻の重要性に関して、最初に述べた ak- における喉頭破裂音「k」がいわばその出自を証明するかのように今日までも堅持されている例を、フランス語から証拠として出しておこう。現代のフランス語で語頭に ésh の綴り字をもつ言葉はかなりの数にのぼるが、その発音はどれも「eʃ」である。ただひとつ例外がある。すなわち échidné (はりもぐら) échinides (ウニ類) échino-dermes (棘皮動物) échicactus (サボテン) échinope (玉アザミ) écho (こだま)等に見られる「ek」の発音である。この音声的事実は、「k」音を保持しているこの語群が ak- から派生したことを物語っている。(écho についてはその印欧語根が (s)wagh- とされているが、écho の語源である古代ギリシャ語 ἦχί (鋭い叫び声、反響音)がドーリア方言では ἤχί であることから見ても、écho は印欧語根の ak- にまで遡るとみたらどうだろうか。)

このように、ひとつの印欧語根は親縁関係にある他の語根との微かな音韻の差異によって微妙に、また相互にはっきりと区別される意味の違いを生み出していく。まだ文字のなかったこの時代、ことばといえば、発声とともに消え去る音声であった。例えば大きく口をあけ、アー「a:」と発声したときの音は流れる水のように、印欧語根 a- の意味は「水」である。つかみどころのない、たゆたう音であるが、こうした流れ去る音声を耳(ウ-ス)で厳しく受けとめることがすなわち「アクース」(聞く)ということであった。われわれは、この「耳」をして「聞く耳」たらしめる ak- という一つの代表的な印欧語根をめぐる、その意味と意味の拡がる幾つかの場面を見てきた。

ところで、われわれはなおしばらくこの地に留まって、このことばの原風景のなかを散策してみよう。というのは、われわれが探索を始めてほどなくして、akous の語根(ə)keu- の音韻分析から、「聞くこと」(to hear)と同時に「見ること」(to look)の本質ともじかに繋がると考えるある不思議な語源の音色が、微かに、しかし確かに、われわれの耳に響き出してきたからである。

(つづく)

資料文献

1. 『超古代へのロマン』英国 BBC 制作: 2000年10月21日、NHK 放映。
2. 『英語語源辞典』(寺澤芳雄編) 1997. 研究社 東京。
3. Etymologisches Wörterbuch der Deutschen Sprache 1967. Berlin.
4. Oxford English Dictionary—2nd. Edition 1989. Oxford Univ. Press. London.
5. Greek-English Lexicon (by Liddell and Scott) 1975. Oxford Univ. Press. London.
6. Oxford Latin Dictionary 1982. Oxford Univ. Press. London.
7. Lateinisches etymologisches Wörterbuch. 3 Bde 1956. Heidelberg.
8. Dictionnaire étymologique de la langue française—Édition dixième 1994. Presses Universitaires de France. Paris.

(平成13年11月19日受理)